

今まで見たことがない出来映え！と評価された「できーくん」使用の水耕イチゴ

インフルエンザが流行していますが、お元気でお過ごしでしょうか。今号は伊勢自動車道の玉城インター近くの「ふれあい農園(三重県度会郡玉城町勝田)」をお訪ねしました。ふれあい農園さんは、約3,000坪の規模でイチゴの観光農園として運営をされています。栽培システムは、土耕、ロック、水耕と、それぞれのシステムの特徴を生かして運用されています。水耕部分は300坪、3段ベットの「とり」システムで女峰を栽培しておられます。水耕の生育が早い特徴を生かしてクリスマス需要期への対応手段として従来から活用されていましたが、一昨年あたりから「管理がデリケートで作りにくい」「収量が落ちてきた」などの理由で、ロックなどへとシステム変更を検討されていましたが、もう1年様子を見ることを責任者の野口長一さんが決断され、新発売となった「できーくん」を昨年9月に導入されたものです。結果は、現在2番果収穫時期ですが写真で見られるように見事な出来

映えで、驚きの連続とのこと。「なぜもっと早く、こういう物ができなかったのか」と苦笑混じりに話しておられました。様変わりの状況に納得をされています。従来との比較では、根の勢いが強く、実の肥大が早くて大きい、また黒葉が出てこなくなって、葉かきの作業がなくなった事を挙げていただきました。実の大きさについては、花数が多いにもかかわらず実が大きくて、以前では、この時期Cランクにも入らないものが結構あったが、それがほとんどなく全体的には昨年比30~40%収量増となっているとのことです。

観光農園では見た目が大事で、来場者は「鈴なり状態」を好む。それに合わせた作り方をしているが、そうすると株への負担が大きくなる。この「できーくん」導入で、新しい根がどんどん出てきている。通常根疲れが出てくる時期だが、それもなし、これで最終までもってくれるのではと期待しているとのこと。

作業的にみると、今までは日数を考え

ながら定期的な養液更新を手作業で実施していましたが、機械が自動的に処理してくれるので、一切手間がかからなくなったし、精神的負担もなくなった。一つ私の仕事が減ったということで喜んでいる・・・と野口さん。

品種的には30%が女峰、残りが章姫ですが、それぞれ特徴があり、概して業務用には女峰の方が人気があるとのことでした。生産品は、観光農園向けで70%、残り30%が市場出荷の運営をされており、この3月からいよいよ観光農園シーズンに入るとのことです。15,000人の来場を予定しておられます。今年は取れすぎて収穫作業が追いついていけないとのこと、従業員からも早く入場者を入れてとせがまれていると、うれしい悲鳴を語っていただきました。取材するたびに思うできーくんの効用「ほんまもん」です。今後さらなるご発展をお祈りしております。

(企画室 小倉東一)

